ニュースレター「ミラノ通信 No.19」

発行日　平成29年10月10日
発行者
富山・ミラノデザイン交流倶楽部
高岡市オフィスパーク 5
公益社団法人富山県デザイン協会内
TEL.0766-63-7140

執筆　池田美雪 ＊ミラノ在住

ミラノ・サローネ・スペシャル　後編

今年は、本会場外にて、ミラノ・サローネの関連イベントとしての大規模な2つの展示が開催された。

1つは、トリエンナーレミュージアムで開催された、「STANZE（部屋）–住まいの哲学」。インテリア・デザインは、デザインの中でも家という生活の一部として我々の日常と密接な関係を持ち、その時代ごとの人々の生活スタイルを司るという大切な課題を担っているが、それ自身が脚光を浴びることは少なく、これまでインテリア・デザインに関する展覧会は数える程しか開催されていない。「住まう」ことにデザインからアプローチし多大な貢献を行なってきたミラノ・サローネが実現したこの展覧会は、各時代を象徴する家具を軸に、11名のクリエイターが各々「部屋」に対するコンセプトを表現し、三次元による百科事典「20世紀のイタリアン・インテリア・デザインの歴史」といえる展示となった。

もう1つの関連イベントは、「space&interiors」展。唯一の市内併催イベントとして、市中心部のポルタ・ヌオーヴォ地区に先頃オープンしたThe　Mall展示会場で開催された。この展示会へは、ロー本会場からのシャトルバス・サービスも実施され、多くの来場者を迎えた。MADE　expo（建築建材見本市）の長年の経験から生まれたこの展示会へは、稀少で臨場感溢れる体験を提供し、最高級の建築の仕上げ素材を紹介することを目的に、各企業から厳選されたプロダクトが集結された。表面材、床材や塗料、装飾、扉、ハンドル、などインテリア・デザインのクオリティを決定付けるマテリアルで溢れた展示により、建築家・デザイナーなど専門分野に携わる来場者へ、トレンディーなデザインマップを提案することとなった。

6日間のミラノ・デザイン・ウイークでは、トリエンナーレミュージアムを筆頭に、Tortona、Lambrate、Brera、旧市街の5VIE、Fabbrica　del　vaporeなどで総数千件を超えるイベントが開催された。

ミラノ・デザイン・ウィークの中の日本

ミラノ・デザイン・ウィーク開催期間中、数々の日本企業の展示は例年以上に大きな話題を呼んだ。トリエンナーレミュージアム2階では、TAKEO PAPER SHOWが紙のインスタレーション巡回展「SUBTLE」を展示。長方形の広大な展示スペースに、紙の柔軟性、多面性、繊細さといった素材の特性を自在に操り創作された数々の紙の彫刻が展示され、来場者はその細やかな作りと発想に大きなため息をついていた(www.takeopapershow.com)。サンワカン

撮影・Andrea Andrea Martiradonna
「stanze」展へのエントランス。

撮影・Andrea Andrea Martiradonna
ミラノのデザイナーFrancesco　Librizziが考える「部屋」のインスタレーション。

space&interiors展の会場となったThe Mallエントランス。

サンワカンパニー社のコンパクトキッチン「セラジーノ」。

パニーは今年初めてEuro Cucina展示会場にて、Japanese minimalismのデザイン・コンセプトを基に4点の新作キッチンを発表。その内の1つであるコンパクトキッチン「セラジーノ」は、6月7日からラ・リナシェンテ・ミラノ本店で開催された「ELLE DECOR BLOW UP KITCHEN&BATHROOM」展において、今年発表された新作8点の1つに選ばれ、大御所メーカーと肩を並べてショーウインドウに展示された。

TOPPAN(凸版印刷株式会社)は、ミラノ市中心部の歴史建造物ウマニタリア修道院で開催された、色鮮やかなイン・ドアとアウト・ドアの家具をクリエイトするPaola Lenti社のパートナー企業として参加。

トヨタ自動車はトルトーナ地区で、歳月を経て変わることを愛でる木製のコンセプトカー「SETSUNA」を展示し大きな反響を呼んだ。同じくトルトーナ地区では、シチズン時計が、2年前にサローネ・アワードを獲得したインスタレーションの第2弾として建築家田根剛と「時」をテーマにコラボレーション。

岐阜県は、ブレラ地区のアートギャラリーで、スイスのデザインスタジオAtelier Oïとのこれまでのコラボレーションの成果として、ヨーロッパ市場向けに選ばれた県内企業のプロダクトを紹介。同じくブレラ地区では、パナソニックが「空間の発明」をコンセプトにしたインスタレーション「KUKAN - The Invention of Space」を展示し、ピープルズ・チョイス賞に輝いた。インスタレーションの紹介ビデオはこちらからご覧ください。http://youtu.be/yqx45OHZZtw

国際アワード　Salone del mobile Milano Award

今年度の参加企業の新作発表展示の製品の中から、革新的なプロジェクトで新しい住まい方の指針を与える製品に与えられる国際アワードSalone del mobile Milano Awardの授賞式が5月4日に行われた。トリエンナーレミュージアムやイタリア工業デザイン協会（ADI）、雑誌Elle Decorイタリアのディレクターといった、デザイン界の重鎮が審査に携わった。

賞は合計で８つ。椅子部門は、Jasper Morrisonデザインのオリジナル合板製チェアーの特性を損なうことなく、単一の型で合成樹脂での製造を可能にしたVitra社のAll Plastic Chairが受賞した。

システム家具部門は、伝統的な素材であるガラスを用いながら現代感覚を表現し、創造力に限界がないことを証明した点が評価されたGlass Italia社の収納家具Commodore。

キッチン部門は、既成概念を打ち破り、「火」を住空間の中心に据えた新しい生活スタイルを提案したLago社のキッチンテーブルAir。

バス部門は、的を射た使用方法と革新的な独特の形態を生み出した創造力が評価されたTubes Radiatori社のヒーターOrigami,。

展示デザイン部門は、シアターを彷彿させるコミュニケーション能力を用いデジタル新技術の新たな役割を活用し、新しい展示の模範を生み出したKartell社。

若手デザイナー部門は、職人としてのスタンスを失うことなく、個人の研究から工業ベースの製造までを担い、深い木材の知識を製造社へ伝えることができる能力が評価されたGiacomo Moorが受賞した(www.giacomoor.com)。

デザイナー部門は、技術と表現手段に整合性をもたせ、新たな美的言語を

外板やフレームなどに「木」を採用した、トヨタ自動車の「SETSUNA」。

岐阜県とAtelier Oïのコラボレーション「CASA GIFU」展。

パナソニックのインスタレーション「KUKAN」の展示の様子。

Vitra社のAll Plastic Chair。

Glass Italia社のガラス製収納システム「Commodore」。

Lago社のキッチン・テーブル「Air」。

Tubes Radiatori社のヒーター「Origami」。

生み出したKonstantin Grcicが受賞(konstantin-grcic.com)。

審査員特別賞は、ハイクオリティのクラフトと工業を結びつける実験的なプロジェクトをプロデュースしてきたことが評価されたデザイナーCristina Celestinoが受賞し、特別賞はSanpaolo銀行および、ミラノ・サローネ特別展 “Before Design: Classic”をディレクションした、Simone CiarmoliとMiguel Quedaが受賞した。

Kartell社の展示。

本来の姿に還るミラノ・トリエンナーレ国際展覧会

今年から3年ごとに開催するという伝統を復活させ、本来の展示精神を取り戻したミラノ・トリエンナーレ国際展覧会では、4月1日、ミラノ・デザイン・ウイークに先駆け、イタリア国内外から多数のVIPを迎えて第21回目のオープニング・セレモニーが催された。この展覧会は、トリエンナーレミュージアム本会場のほかブレラ美術館やレオナルド・ダ・ヴィンチ科学技術博物館など合計18カ所で9月12日まで開催された。

本会場内の5つのメイン展示は、前述の「STENZE」の他、20世紀から21世紀にかけて女性によって創り出されたモノを検証し、女性が内包する特性と力とを再考する「W.Women in Italian Design」。建築家Andrea Branziと原研哉により、石器時代から人工知能の時代へと変遷していく人々の活動と欲望の歴史を、100対の道具と動詞を組み合わせて定型詩のように描いた展示「Neo preistoria-100Verbi:新・先史時代　100の動詞」。芸術・デザイン・ファッション・テクノロジーの融合体であるイタリアン・ジュエリー50点を展示した「Brilliant! I futuri del gioiello italiano (イタリアン・ジュエリーの未来)」。21世紀を特徴付ける事象の1つである、グローバル化と多民族の共存について考察する前述Branziによる展示「La Metropoli Multietnica」である。

W.Women in italian designの展示の一部。1世紀の間に女性によって創られた作品が年代を追って展示された。

イタリアン・ジュエリーの展示風景。ショーケースに近づいて見ると、ジュエリーの中に小さな宇宙が存在することに気づく。

富山県内の伝統工芸品を中心としたエキシビジョン

この国際展への国際参加部門の1つとして、富山県主催、富山県総合デザインセンター共催による「Design of ripples and resonance, a Sound Landscape from Toyama」展が開催された。

富山県では昨年、ミラノ・エキスポでの「富山県の日」(平成27年8月1日-2日)に合わせて、トリエンナーレミュージアムにて富山県伝統工芸品展示会(7月31日-8月2日)を開催した。この展示がCancellato館長から高い評価をいただき、今回の国際展への出展に至った。自治体単位でのミラノ・トリエンナーレ国際展覧会への出展は日本国内では富山県が初めてであり、また、国際展覧会のメイン会場であるトリエンナーレミュージアムでの展示は、日本からは富山県のみであった。

この展示は、トリエンナーレミュージアムの1階に設けられた110平米のスペース内に、富山県内で制作・製造された数々の伝統工芸品とデザイン製品を「部屋」「文具」「装飾」「健康」「食」「祈り・祝い」の6つのテーマで括りショーケース内に収め、また、富山県の主要産業の一つである金属製品が、その源流であるお寺の鐘で紹介された。鐘は時を告げる役割を果たすだけでなく、その鐘の音は生活の苦しみの声を引き出し、それらを遠ざけるとともに精神的に人々を目覚めさせる役割も持つとされる。展示された大きさの異なるおり

「食」をテーマにショーケースに収められた数々の製品。

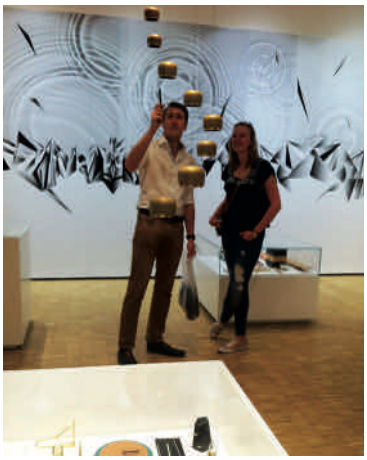
んを奏で、訪れたそれぞれの人が音色を聞いて、心の声を聞く静寂な展示となった。伝統工芸品とデザイン作品の展示を眺める来場者たちは、その精巧な作りと斬新なデザイン性に驚きが隠せないようであった。会場では来場者へのアンケートも実施され「風鈴やおりんの音色が美しい」「日本のイメージを思い起こさせてくれる」「音の空間演出が素晴らしい」「自らうちわを使って風鈴をならすことができるようにするのは、おもしろいアイデア」「自分の生活のなかに（展示品を）取り入れてみたい」「伝統的でありながら（モダンなデザインを取り入れるなど）革新的である」「木と金属の組み合わせがおもしろい」「実際に購入したい」などのコメントが寄せられた。

このエキシビジョンに関連して開催期間中の6月29日、トリエンナーレミュージアム内で県内企業の参加により、産業振興を目的とした商談会が行なわれた。参加企業は(株)天野漆器・(有)桂樹舎・(株)小泉製作所・(株)能作・(株)山口久乗の5社（あいうえお順）。各社とも、自社製品の中からイタリア・ヨーロッパ向けの商品を厳選し、イタリアに販売網を持つバイヤーたちへ商品の説明を行なった。

この商談会では、イタリア市場へ商品を紹介し今後の販売網を作り出すという目的とともに、富山県の文化に触れてもらい、商品のバックグラウンドをまず知ってもらいたい、という思いも実現され、スペース内に展示されたおりんを中心に、ヴォイスパフォーマー・キリロラと、堀つばさが奏でるおりんと柴田俊幸によるバロック・フルートのアンサンブルの2つのパフォーマンスが行われた。ミラノ・トリエンナーレ国際展覧会のオフィシャル・サイトからも発信されたこのイベントには多くの来場者が集まり、イタリアではまだあまり知られていないこの鐘の音に、みなが神妙に聞き入った。舞台の傍らで、小さなイタリア人の少女がじっとパフォーマーのようすを見つめていたのが印象的だった。彼女らの抜けるような澄んだ声におりんの音のコンビネーション、まるで空間を別次元へと引き上げていくようであった。

富山県の展示を招聘して下さり、また、この日パフォーマンスを見に来てくださったCancellato館長へインタビューを行なった。

池田　今回の富山県の展示に、どのような魅力を感じられますか？
館長　私がこの展示で非常に大事だと感じたことは、伝統的な素材と技術の使い方を改革していく能力です。例えば、ここで使われている金属素材は、過去を呼び起こしながらも、現代の機能に合わせて新しい解釈がなされている。もう一つは、錫の素材の機能性が他の素材に比べ非常に大きな可能性を秘めていることです。この素材がどのように作られるのか、自然の中で見つけられるのか、科学的に作られたのかは分からないけれど、1つの稀な成功例として、この素材が非常に大切にされ、決してありふれたものにしてはならないと思います。
池田　これからのデザインのキーワードはなんでしょうか？
館長　私の考えるところ、これからのデザインのキーワードは「（何々）とのデザイン」です。これは「（何々）のためのデザイン」の前に考えられるべきです。もう一つ非常に大事な要素は、富山県が持っているような「過去との関係を定める能力」と「革新的な力」を持つこと。これらが将来のデザイン問題に立ち向かうためのキーワードです。


音階の異なるおりんの音を楽しむ来場者の様子。

展示空間を自由に行き交い、ダイナミックにパフォーマンスを繰り広げるキリロラ。

パフォーマンスを終えて。左から堀つばさ、キリロラ、柴田俊幸。

パフォーマンスの鑑賞を終え、笑みがあふれるCancellato館長。

パフォーマンスに魅了された後の商談会。富山県内の伝統工芸品に興味を持ち、その可能性を見極めに来たバイヤーたち。各事業者が順次、自己紹介を行ない商品の説明に入る。一通り紹介を終えた後、バイヤーたちは商品を自分たちの手にとって、1つ1つ吟味する。バイヤーたちの意見は、全般的に感嘆に溢れるものであった。「すべてが素晴らしいものばかり。これまでイタリアで知られている日本製品は多くあるが、それ以上に興味深いものを見せてもらった」「この創造力、音階の異なる鈴、イタリアにもベルはあるが、それとは違うとてもパワフルなものを感じた」「細部まで手で作られ、それがとても精巧にできていて、とても信じがたい出来栄えだ」。その中で、バイヤーとして来られた日本人男性からは、「どの商品もイタリア市場で販売するにあたり価格は問題ないが、日本の伝統にこだわりすぎると受け入れられる幅が狭くなる。イタリアの生活スタイルをもう少し勉強して、それに合わせたものを作ることが必要なのでは」との意見があった。

館内の会議室で行なわれた商談会にて、参加事業者がバイヤーたちへ自社製品を紹介する様子。

蓮池槇郎氏　Compasso d'Oro受賞！

ミラノで50年以上に渡り精力的に活動されてきた、富山県と深い交流をもつデザイナー蓮池槇郎氏（当倶楽部のミラノ支部長もお引き受けいただいている）が、デザイン界のノーベル賞ともいわれるCompasso d'Oroインターナショナル・キャリア賞（Premio Compasso d'Oro alla carriera internazionale）を受賞された。心よりお祝い申し上げます。

第24回目の今回、蓮池氏と共にイスラエル人デザイナーRon Aradとイギリス人デザイナーJames Dysonが受賞した。この賞は、2011年にデザイナー喜多俊之氏が日本人として初めて受賞し、続いて蓮池氏が2人目の受賞となった。イタリアで活動している日本人デザイナーたちへ、今後、大きな期待が寄せられる。（イタリア国外で活動する個人や企業に与えられるインターナショナル賞は、2014年に故栄久庵憲司氏が受賞されている。）

6月14日、ミラノ市中心部にあるIsimbardi宮殿にてCompasso d'Oro賞13作品、キャリア賞12名、ヤング・プロジェクト賞牌3作品に対する授賞式が行われた。

授賞式での蓮池氏のインタビューはこちらからご覧ください。　https://youtu.be/0lwnxj3r0zU

インタビューのことば（日本語訳）

「とても嬉しいことです。イタリアの巨匠たちを想い出し少し興奮しています。私は、彼ら巨匠たちから学ぼうと考え、イタリアに来ました。今、Compasso d'Oroを受賞し、言うなれば歴史に名が残されるということ、これは実に光栄なことです。」

画像・NERI SPA

1954年にCompasso d'Oro賞が発足して以来、この賞には、デザイン大国イタリアの経済発展と国内リソースの育成という主旨が貫かれている。

第1回目のCompasso d'Oro賞は、賞発足当時、他社に先駆けいち早く社内にデザイン部を抱え、グラフィック・デザイン・建築・コミュニケーションなどのプロジェクト文化の中心を担っていた、リナシェンテ百貨店の主催により開催された。この年は第10回ミラノ・トリエンナーレ国際展覧会が開催された年でもある。

この頃、リナシェンテ百貨店のデザイン部内では、建築家Gio Pontiを中心にMarco Zanuzo、Bruno Munari、Mario Belliniなど、才能あふれる若いデザイナーたちがデザイン作業に携わっていた。そして、彼ら若いデザイナーの才能を広く世に知らしめようと開催された展覧会が、現在に至るCompasso d'Oro賞の出発点となった。

Compasso d'Oro（黄金のコンパス）という名前の由来は、賞の発足前、この賞をいかに命名するか議論が続けられていた会議中に、ミラノの建築家Albe Steinerが偶然ポケットから取り出した、彫刻家たちが使うコンパスに由来しているといわれている。コンパスは黄金比など、多空間の調和のとれたプロポーションを作り出す道具として使われることから、すべてのデザイン要素のハーモニーを満たした工業デザイン作品に与えられる賞の名前としてふさわしいものであった。

この賞の設立の目的は、工業デザイン製品の紹介に加え、工業製品文化への認識と振興を広く推進し、クオリティとデザインの向上を求めるイタリア国内企業の誕生・育成を促すことであった。第1回目は、オリベッティ社のタイプライターやムラーノ島のガラスの花瓶、スポーツ用具、玩具など計15作品が賞を獲得した。1958年、賞の運営は公平性とその保全性を保つ為に、MagistrettiやMunariなど9名の建築家・デザイナーたちが1956年に創設したイタリア工業デザイン協会（以下ADI）へと移行された。

時代を経て、デザインの領域は工業デザインを超え、現在ではCompasso d'Oro賞の対象となるデザイン・カテゴリーは「住まい」「移動」「労働」「個人」「素材とテクノロジー・システム」「サービス」「コミュニケーション」「企業」「理論・歴史・批評・出版プロジェクト」「ソーシャル」「フード」の11項目に拡張された。さらに、イタリア国内において行なわれる設計・研究・教育・製造・販売の領域で功績が認められた個人あるいは企業に与えられるインターナショナル・キャリア賞、企業・研究所・教育機関・デザイナー・あるいは個人に対し、イタリア国外でデザイン文化の推進および肯定と革新を行なった功績を讃えるスペシャル・インターナショナル賞、若手デザイナーを支援する目的で、デザインを学ぶ学生たちの卒業制作々品に与えられるヤング・プロジェクト賞牌の3つの特別賞が設けられている。

賞の審査委員会は、ADIが指名するデザインに造詣が深い国際的なエキスパート5名から7名で構成されているが、受賞者・受賞作品の選択に至るまでに、イタリア国内のデザイナー、評論家、歴史家、ジャーナリスト、ADIのメンバーなど計150名で構成されたパーマネントデザイン委員会が、絶え間なくデザイン活動の情報を検証し、優れた作品がADI INDEXとして年鑑にまとめられ、その中から選ばれた最高作品がCompasso d'Oro賞を受賞するのである。

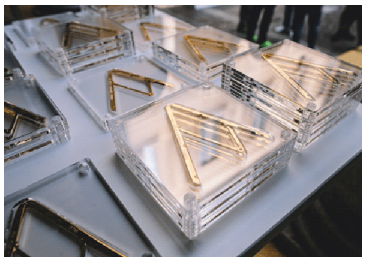
イタリアでのMAKIO HASUIKEは、1982年に創設したブランド"MH Way"の

画像：www.adi-design.org
授賞式会場入り口の様子。

画像：www.adi-design.org
授賞式の様子を3分にまとめたビデオ。
https://youtu.be/g4FszFWuKJs

画像：www.domusweb.it
第一回Compasso d'Oro Rinascente展のカタログの表紙。

画像：www.adi-design.org
第一回Compasso d'Oro受賞作の一つ、Bruno Munariデザインの玩具。


画像：www.adi-design.org
受賞者へ贈られる「黄金のコンパス」の盾。

画像：www.adi-design.org
本年度の受賞作の一つ、Flavio ManzoniとFerrari Design、Werner GruberのコラボレーションによるFERRARI社のFXX Kモデル。

デザイナーとして広く知られており、機能性とファッション性を兼ね備えたビジネス・バッグ・シリーズは、若者からビジネス・ピープルに至るまで幅広く愛用されている。初期のデザインから現在に至るまで、数え切れないほどの製品がADI INDEX年鑑に保存され、Compasso d'Oroを受賞。また、トリエンナーレミュージアム、パリ・ポンビドゥ・センター、ウィーン応用美術博物館、ニューヨークMOMAに、パーマネント・コレクションとして収蔵されている。デザインからディストリビューションまで一貫してプロジェクトされる、イタリアでも数少ないサクセス・デザイン・カンパニーである。
MH Wayのサイトはこちらからご覧ください。　www.mhway.it

　ご自身のブランドの展開と同時に、これまで多種多様な分野のイタリア企業・国際企業と共にプロジェクトとコラボレーションを行ない、常に形状の美しさと革新的な要素を包括するデザイン・ソリューションを生み出し、多くの製品を成功に導いてきた。
蓮池槇郎氏がこれまで手掛けてこられたプロジェクトは、こちらのサイトからご覧ください。　www.makiohasuike.com/it/product-design

　このような長きに渡る蓮池氏の精力的な活動の実績が、今回のCompasso d'Oro受賞につながったことは言うまでもない。
今後の益々のご活躍をお祈りいたします。

画像：www.mhway.it
MH Wayの製品の一つ、2013年に発表されたMIX Matchシリーズより。

画像：www.makiohasuike.com
蓮池槇郎氏がデザインしたNERI社の照明システムAlya。

執筆者　略歴

池田美雪　インテリアデザイナー

武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒
Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒
1994年よりミラノ在住
主に個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わる
設計外に携わったプロジェクトとして
"do it jubunde"展（無印良品、ニコレッタ・ブランヅィとのコラボレーション）を企画ならび実現
"Soundesign"展（Marangoniファッションスクール主催）にて弦楽器"Caravantar"を発表
写真雑誌"ZOOM"日本版のコーディネート、翻訳　など
"TuPlay"展にてグラス楽器"FASOLA"を発表
「Bicarbonato : mille usi per te e la tua casa」執筆　（FAG出版社より）
　（イタリアの生活に密着した重曹の活用方法を書き綴った本）
"B.A.C."展（City Art ギャラリー）にて、インスタレーション"Ma.Ma.Ma" を発表
"Made in Bovisa"（Bodio小学校の子供たちとのプロジェクト）を起案、コーディネイト
第21回ミラノ・トリエンナーレ国際博覧会エキシビジョン"W.Women in Italian Design"に作品出展

クリエイティブ・コンサルティング会社（デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン）の共同経営
デザイン・ アートに関するコーディネイト、翻訳および通訳
日本とイタリアの文化交流を推進するデザイン・プロジェクト"stu-art"コーディネイター